

アサーション行動尺度における信頼性・妥当性の検討

金子 和弘*・今井 有里紗**・加藤 孝央***
常本 智史****・城 佳子*****

Development of Psychological Assertion Behavior Scale and Investigation of Its Reliability and Validity

Kazuhiro KANEKO, Arisa IMAI, Takao KATO, Satoshi TSUNEMOTO, Yoshiko JOH

問題と目的

近年、職場の人間関係や中・高・大学生における友人関係のあり方など、対人場面における関係形成について見直されている。とくに、人間関係の希薄化が主張されるようになり、ライフイベントの体験を通して獲得されるはずである社会的スキルが不十分であり、適切に自分自身の感情や考えを表現できない傾向にあることが指摘されている（廣岡・廣岡，2002）。このような対人関係における特徴は、とくに青年期に多くみられる。

本来、心理・社会的変化とともに、青年期の発達課題である自己の模索および自己の確立に取り組もうと試み、その中で感じる不安定感や疎外感を解消するために、親しい友人関係を望み、形成するよう努める。しかし、現代の青年における友人関係の特徴として、他者からの視線に気を遣い、自分自身への関心からも対人関係からも退却してしまうという特徴を持つ一方で、表面上の比較的軽い付き合いを望む傾向にあることが指摘された（岡田，1995，1999）。また、橋本（1997）は、大学生において円滑な人間関係の形成および維持が中心的な課題であることを指摘している。そのため、意見の対立など友人との衝突を避けようとし、率直な感情表現をせず自己主張をしない傾向にある一方で、価値観の共有や率直な自己表明が可能な関係性をも望んでいる（柴橋，2001，2004）。

つまり、表面的に楽しく円滑な友人関係を望むあまり、過度に気を配り、遠慮して率直な自己表明および感情表出が行えない傾向にある。この傾向が、感情の保持・蓄積を促し、結果的に攻

* かねこ かずひろ 文教大学大学院人間科学研究科
** いまい ありさ 文教大学大学院人間科学研究科
*** かとう たかお 文教大学大学院人間科学研究科
**** つねもと さとし 文教大学大学院人間科学研究科
***** じょう よしこ 文教大学人間科学部

撃行動など不適切な感情表出および自己表明につながる。このことは、橋本（1997）による日常のコミュニケーションにおける、過度な遠慮や気配りによる精神的疲労である「対人磨耗」というストレス事態に該当する。さらに、適切な自己表明および感情表出が行えないことが、過度な不安や抑うつなど、心理的健康にネガティブな影響を及ぼすことも指摘されている（内田・山崎, 2008）。

以上のことから、青年期における対人関係の傾向として周囲に対する過度な遠慮や配慮、自分の気持ちを適切に伝えることが不得意であるといえる。このことが要因となり、心理的ストレスの蓄積や心理的健康に対するネガティブな効果に発展すると考えられ、適切な感情表現などコミュニケーション・スキルについて検討されるようになった。

そこで、適切な自己表現を可能とするコミュニケーション・スキルとしてアサーション・トレーニング（以下、AT）が注目されている。

Wolpe（1958）が神経症の治療において、アサーション（主張反応）が不安の抑制に有効な反応の一つであることを報告した。この主張行動の重要性に着目し、不安に拮抗する反応として、怒り感情の表出を含む行動療法の一技法として主張訓練法（AT）が開発された。主張訓練法は、主として対人関係上の問題を抱えた個人を対象に主張的行動の訓練を行い、それを通して対人不安の除去や適切な社会技能の形成をはかる治療技法として用いられた。

McFall & Lillesand（1971）は、これまでにATの実証研究が少なかった理由として、定義が不明瞭であったことを指摘している。具体的には適切な自己主張とされるアサーションと、不適切な自己主張である攻撃的行動が明確に区別されていなかった点である。アサーションの定義は「肯定的結果を招く行動（Rich & Schroeder, 1976）」、「自己表現（Rathus, 1973）」、「個人の権利の主張（Alberti & Emmons, 1970）」など多様であり、定義が拡散している。Galassi & Galassi（1978）は「アサーティブ行動は他の行動的概念と比べて、セラピストの理論や価値観に依存して定義される」と述べ、アサーションにおける定義の不確定さを指摘している。

明確な定義の検討を背景に、自己主張を適切にする要素が検討され、なかでも「単なる自己主張」に「付加的な言葉」を加えることの効果が多く検討された。例えば、「共感的な自己主張」が通常のアサーションと比較して、より親切で敵対性が低いと評価されることが報告されている（Woolfolk & Dever, 1979）。さらにWildman（1986）は、付加的な言葉がなくても、主張行動と同時にちょっとした会話を行うことでアサーションのネガティブな面が解消されることを示した。

Linehan, Heard, Armstrong（1993）は、それまでのアサーションの定義が自己主張における「明確さ」や「直接さ」といった形態的側面から捉えられてきたことに対し、自己主張の機能的定義の有効性を改めて説明し、これまでのアサーションに代わるものとして「対人的効果性（interpersonal effectiveness）」の概念を提案した。対人的効果性とは、3つの目標を想定しており、それぞれ、「自らの目標獲得」、「相手との関係性維持・改善」、「自尊心の維持・向上」の効果的な達成を意味するスキルである。Linehan 他（1993）は境界性人格障害患者のための認知行動療法である弁証的行動療法を開発し、この中にATを組み込んだ。

日本においては、平木（1993）による本が出版され、アサーションという言葉が広く認知されるようになり、心理・教育・産業など多くの場面で実践されるようになった。日本におけるアサーションは、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を敵対的ではない仕方で表現する行動」のことで（濱口, 1994）、精神的健康と良好な人間関係をもたらし行動であると定義されている（平木, 2005；中釜, 2005）。また、柴橋（1998）はこの定義にもとづき、「自分の

考え、気持ちなどを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、相手も同じように発言することを奨励する態度」であると定義している。すなわち、アサーションは従来の定義に加え、関係の調整と維持、その場に適していると判断するモニタリング能力などの側面を含むことが示された。

アサーションの実証的研究として、村山・山田・峰松・冷川・田中・田村（1991）は、アサーションを測定するための尺度を検討した。その結果、自己主張の難易度の次元を測る **Restriction** 尺度と自己主張が他者に不快感を与える程度を測る **Assertion-Aggression** 尺度の2因子解構造の尺度が作成された。村山他（1991）は作成した尺度を用いて、精神的健康との関連性を検討し、自己主張が抑制傾向にあると心理的問題を抱えやすいことを示唆している。尺度研究に関して、高橋（2006）は、従来の尺度は、尺度により測定する概念が異なること、また、適切な自己表現や関係の調整・維持に関する定義が含まれているにも関わらず、あまり考慮されていないことを指摘している。

以上のように、アサーションに関して研究されているものの、アサーションの定義は統一されていない。また、尺度を用いて測定している研究が少ない反面、使用された尺度の信頼性・妥当性が検討されていないことが多い。さらに、心理的健康との関係性をみた実証的研究は少ない。

そこで本研究では、アサーションを行動であると捉え、アサーション行動における尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、心理的健康との関係性について検討することを目的とする。なお、本研究ではアサーション行動を柴橋（1998）の定義を参考に「自己主張」、「他者尊重」、「関係の維持・向上」、「適切な自己統制」の観点から検討する。また、心理的健康との関係性については、心理的ストレスとアサーション行動との関連性を検討する。村山他（1991）の結果からも、心理的ストレスとアサーション行動は、負の相関関係にあることが推測され、これを仮説とする。

方法

調査対象者

調査対象者は4年制大学に通う男子大学生65名（平均年齢20.43歳、 $SD=1.17$ ）、女子大学生81名（平均年齢19.94、 $SD=0.81$ ）の計146名（平均年齢20.16、 $SD=1.01$ ）であった。さらに、性別および年齢が不明であった2名を追加した計148名を分析対象とした。

調査期間

2009年12月11日（金）から18日（金）にかけて行った。

手続き

集団法による調査を実施した。質問紙は協力を依頼したうえで配布し、調査対象者の回答後、即時回収した。なお、対象者に対する倫理的配慮として、調査への参加は自由であること、プライバシーは保護されることに関して口頭およびフェイスシートにて教示した。

質問紙の構成

アサーション行動尺度

村山他（1991）が作成したアサーション行動尺度（65項目）のうち、Assertion-Aggression 尺度 35項目を参考に、平木（1993）が作成したアサーティブ行動チェックリスト 10項目と、他者尊重およびモニタリングに関する項目 6項目を追加したもの（51項目）を用いた。追加した項目は、他者尊重およびモニタリングに関連すると考えられる項目を先行研究の結果を参考に作成した。なお、Assertion-Aggression 尺度において質問紙作成時に項目内容を検討し、不明確である項目については一部表現の改訂を行った。

ENDCOREs

コミュニケーション・スキルに関する尺度として、藤本・大坊（2007）が作成した ENDCOREs の全 24項目を用いた。ENDCOREs はコミュニケーション・スキルに関する諸因子を階層構造に統合したものであり、自己統制・表現力・解読力・自己主張・他者受容・関係調整の 6因子から構成される。

Stress Response Scale-18 (SRS-18)

心理的健康に関する尺度として、鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1997）の Stress Response Scale-18（以下 SRS-18）の全 18項目を用いた。SRS-18 は、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力の 3下位尺度各 6項目から構成される。

基準関連妥当性の検討

妥当性検討に用いた尺度は、同一概念を測定する尺度を一部援用し、本調査においては ENDCOREs（藤本・大坊，2007）を用いた。アサーション行動尺度と ENDCOREs は共にコミュニケーション・スキルの概念に含まれることから、両尺度間において正の相関が予想される。

結果処理法

アサーション行動尺度、ENDCOREs、SRS-18 において因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、各因子得点を算出した。また、各因子における内的整合性を検討するため、信頼性分析を行った。なお、SRS-18 においては尺度の素点から総得点を算出した。

妥当性検討のため、アサーション行動尺度と ENDCOREs の因子得点を用いて、各因子における Pearson の相関係数を算出した。さらに、因子得点を用いて、心理的健康度である SRS-18 の各因子および総得点を従属変数、アサーション行動尺度および ENDCOREs の各因子を独立変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。なお、分析には統計パッケージ SPSS を用いた。

結果

尺度項目の検討

アサーション行動尺度 51項目に対して、因子的妥当性の検討および尺度の精緻化のため、主

因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値 1.0 以上を基準として因子数を決定し、16 因子が算出された。さらに、共通性が .30 以下および因子負荷量が .40 以下であった 39 項目を削除して再度因子分析を行い、4 因子解 12 項目とした（累積寄与率 54.05%）。

第 1 因子は「話し合いで反対意見を言うことができる。」、「話し合いで自主的に意見を言うことができる。」など 3 項目から構成され、「自己主張因子」と命名した。第 2 因子は「相手の意見を理解するように努める。」、「相手と対等な関係で付き合うことができる。」など 4 項目から構成され、「他者尊重因子」と命名した。第 3 因子は「ある場面で求められていることがわかれば、それに合わせて自分の行動を調整していくことはたやすい。」、「ある場面で他のことが求められていることに気がつけば、それに応じて自分の行動を調整していくことができる。」など 3 項目から構成され、「客観的自己統制因子」と命名した。第 4 因子は「注文した通りでなかったとき、そのことを言って交渉することができる。」、「レストランで店員にメニューについて質問できる。」の 2 項目から構成され、「説得・交渉因子」と命名した。その結果を表 1 に示した。

また、ENDCOREs に対して因子分析を行った結果、藤本・大坊（2007）の 6 因子解と異なった結果が得られた。本研究では、先行研究における他者受容因子が、関係調整因子に統合され 5 因子解となった。先行研究を参考に因子名を決定し、第 1 因子を「関係調整因子」、第 2 因子を「自己主張因子」、第 3 因子を「解読力因子」、第 4 因子を「自己統制因子」、第 5 因子を「表現力因子」とした。SRS-18 に対して因子分析を行った結果、鈴木他（1997）と同様の因子構造を得たので、因子名を援用した。第 1 因子を「不安・抑うつ因子」、第 2 因子を「不機嫌・怒り因子」、第 3 因子を「無気力因子」と命名した。

信頼性の検討

尺度の信頼性の検討のため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、自己主張因子は $\alpha = .817$ 、他者尊重因子は $\alpha = .712$ 、客観的自己統制因子は $\alpha = .751$ 、説得・交渉因子は $\alpha = .721$ であり、概ね高い信頼性係数を得た。

妥当性の検討

アサーション行動尺度の基準関連妥当性の検討のため、アサーション行動尺度の各下位尺度の因子得点と ENDCOREs の各下位尺度の因子得点を用いて、Pearson の相関係数を算出した。その結果を表 2 に示した。アサーション行動各下位尺度と ENDCOREs 各下位尺度において、一部低い相関がみられたが、概ね中程度の正の相関がみられた。

重回帰分析

SRS-18 の各因子を従属変数、アサーション行動尺度の各因子を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、不安・抑うつにおいて、説得・交渉が有意であった ($R = .27, R^2 = .07, F(1, 143) = 11.62, p < .01$)。無気力において、他者尊重が有意であった ($R = .37, R^2 = .14, F(1, 143) = 22.27, p < .01$)。不機嫌・怒りにおいてアサーション行動尺度と関連性はみられなかった。その結果を表 3 と表 4 に示した。また、SRS-18 を従属変数、ENDCOREs を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、不安・抑うつにおいて、自己統制が有意であった ($R = .34, R^2 = .12, F(1, 144) = 18.82, p < .01$)。不機嫌・怒りにおいて、自己統制が有意であった ($R = .25, R^2 = .06, F(1, 144) = 9.34, p < .01$)。無気力において、他者尊重が有意であった ($R = .27, R^2 = .07, F(1, 144)$)

表1 アサーション行動尺度因子分析表（主因子法，プロマックス回転）

項目	I	II	III	IV	共通性
I.自己主張因子($\alpha = .817$)					
話し合いで反対意見を言うことができる.	.997				.899
話し合いで自主的に意見を言うことができる.	.708				.587
人と意見が違ったとき, 自分の意見を言える.	.579				.462
II.他者尊重因子($\alpha = .712$)					
相手の意見を理解するように努める.		.687			.513
相手と対等な関係で付き合うことができる.		.652			.432
相手にわかりやすいように説明する.		.591			.327
相手を受け入れられる.		.591			.385
III.客観的自己統制因子($\alpha = .751$)					
ある場面で求められていることがわかれば, それに合わせて自分の行動を調整していくことはたやすい.			.891		.471
ある場面で他のことが求められていることに気がつけば, それに応じて自分の行動を調整していくことができる.			.624		.694
自分が置かれたどんな場面でも, そこに求められていることに合うように行動することができる.			.552		.545
IV.説得・交渉因子($\alpha = .721$)					
注文した通りでなかったとき, そのことを言って交渉をすることができる.				.777	.546
レストランで店員に, メニュー等について質問できる.				.716	.625
固有値	2.574	2.458	2.127	2.087	
寄与率(%)	28.755	12.859	7.413	5.025	
累積寄与率(%)	28.755	41.614	49.027	54.053	
因子間相関		.289			
		.255	.448		
		.545	.311	.265	

= 11.44, $p < .01$). しかし, SRS-18 の総得点とアサーション行動尺度および ENDCOREs において関連性はみられなかった. その表 5, 表 6, 表 7 に示した.

表2 アサーション行動各下位尺度と ENDCOREs 各下位尺度との相関係数表

	自己 主張	他者 尊重	客観的 自己統制	説得・ 交渉	関係 調整	自己 主張	解読力	自己 統制	表現力
自己主張	1.00								
他者尊重	.32**	1.00							
客観的 自己統制	.29**	.53**	1.00						
説得・ 交渉	.63**	.39**	.33**	1.00					
関係調整	.08	.51**	.52**	.17*	1.00				
自己主張	.50**	.42**	.42**	.46**	.48**	1.00			
解読力	.18*	.25**	.36**	.25**	.59**	.54**	1.00		
自己統制	.12	.41**	.47**	.18*	.55**	.56**	.41**	1.00	
表現力	.28**	.36**	.35**	.29**	.37**	.59**	.35**	.30**	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

考察

因子構造の検討 アサーション行動尺度の因子分析の結果、自己主張、他者尊重、客観的自己統制、説得交渉の4つの因子が抽出された。関係の維持・向上に代わり、従来、自己主張に含まれてきた概念である説得交渉が、独立した1因子として抽出される結果となった。因子分析の結果から尺度の因子的妥当性が保証され、4つの概念が弁別可能であると考えられる。つまり、アサーション行動において自己主張できるが客観的に自己統制できていないことや、他者尊重しているが説得交渉ができないことなど、何通りかアサーション行動における特徴が推測できる。しかし、因子間において一部低かったが、概ね中程度の正の相関がみられたことから、各因子は独立した概念ではなく、アサーション行動における一側面としてとらえるのが妥当である。今後、従来のアサーション尺度並びにコミュニケーション・スキルの概念との関連性を検討し、尺度の精緻化を含むアサーション行動について更なる検討の必要性が考えられる。

アサーション行動尺度における各下位尺度においては、高い信頼性が得られたので、安定した高い内的整合性が示されたと考えられる。一方基準関連妥当性については、アサーション行動尺度の各下位尺度における因子得点と ENDCOREs の各下位尺度における因子得点と一部低い値を示したが、概ね中程度の正の相関があることが示され、安定した基準関連妥当性が確認された。下位尺度ごとに相関を比較すると、アサーション行動における他者尊重および客観的自己統制は他の下位尺度と比べ、ENDCOREs の関係調整との間で高い相関の傾向にあった。本尺度において、関係の維持・向上に関する項目が他者尊重および客観的自己統制に含まれる結果となったこ

表3 不安・抑うつを従属変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 不安・抑うつ		有意確率
	β	t 値	
説得交渉	-0.27	-3.41	.001
		$R^2=.27$	$R^2=.08$

表4 無気力を従属変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 無気力		有意確率
	β	t 値	
他者尊重	-0.37	-4.72	.001
		$R^2=.37$	$R^2=.14$

表5 不安・抑うつを従属変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 不安・抑うつ		有意確率
	β	t 値	
自己統制	-0.34	-4.34	.001
		$R^2=.34$	$R^2=.12$

表6 不機嫌・怒りを従属変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 不機嫌・怒り		有意確率
	β	t 値	
自己統制	-0.25	-3.06	.01
		$R^2=.25$	$R^2=.06$

表7 無気力を従属変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 無気力		有意確率
	β	t 値	
他者尊重	-0.27	-3.38	.001
		$R^2=.27$	$R^2=.07$

とが考えられる。従来の尺度には関係調整の概念が不十分であったことから、従来のアサーション尺度よりも本尺度における有用性が示唆された。また、アサーションにおいて関係調整の概念として他者尊重および客観的自己統制が必要な概念であることが考えられる。しかし、因子分析の結果、項目が大幅に削除されたことから、本研究における因子分析の結果は必ず他の集団においても同様の結果が得られるとは言いがたいため、削除された項目を含め、尺度の項目内容について更に検討する必要がある。

関連性の検討 心理的健康とのアサーションおよびコミュニケーション・スキルの関連性の検討のため、重回帰分析を行った。その結果、アサーション行動において不安・抑うつと説得交渉との間に負の関連性がみられた。このことから、自分が不利益を被った場合に説得、交渉することができない度合いが高いと、その際の感情が蓄積されることになり不安や抑うつ反応を示す傾向にあると考えられる。また、無気力と他者尊重との間に負の関連性がみられた。このことから、関係形成において他者を受容、尊重する度合いが低い傾向にあると無気力になり、関係を向上させようと試みない傾向にあると考えられる。また、コミュニケーション・スキルにおいて不安・抑うつおよび不機嫌・怒りと自己統制との間で負の関連性がみられた。このことから、自分自身の感情をコントロールする度合いが低いと、不安や抑うつ気分が高まり、また、不機嫌になりいららす程度が高まることが考えられる。また、無気力において他者尊重との間で負の関連性がみられたことから、アサーション行動と同様に関係形成において他者を受容、尊重する度合いが低い傾向にあると無気力になり、関係を向上させようと試みない傾向にあると考えられる。こ

これらのことから、村山他（1991）の結果と同様、アサーション行動およびコミュニケーション・スキルと不安・抑うつなど心理的な不健康感との間に負の関連性がみられたことから、仮説は支持された。すなわち、アサーション行動およびコミュニケーション・スキルが高いほど、心理的な不健康感が解消されやすく、心理的健康が高まることが推察される。しかし、認められた関連性における説明率はいずれも低かったことから、今後更なる検討が必要である。

今後の展望

本研究において、アサーション行動尺度を作成した結果、信頼性・妥当性共に安定した結果を得ることができた。このことから、尺度における安定性が示唆され、アサーション行動の測定における有用性が示された。また、アサーション行動と心理的健康との関連性が示唆されたことから、アサーション・トレーニングなどの実践において、本尺度は有効であると考えられる。しかし、関係の維持・向上が因子構造に当てはまらなかった点や関連性の説明率が低かった点を含み、今後、明確な定義付けおよび尺度項目の精緻化など、更なる検討が必要である。

引用文献

- Alberti, R. E. & Emmons, M. L. (1970). *Your Perfect Right: A Guide to Assertive Behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. *パーソナリティ研究*, 15, 3, 347-361.
- Galassi, M.D., & Galassi, J. P. (1978). Assertion: A critical review. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 15, 16-29.
- 橋本 剛 (1997). 現代青年の対人関係についての探索的研究. *名古屋大学紀要*, 44, 207-219.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み. *社会心理学研究*, 13, 64-75.
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・田中克江・田村隆一 (1991). 精神的健康に関する研究—アサーション尺度の改訂と分析—. *健康科学*, 13, 97-103.
- 濱口佳和 (1994). 児童用主張性尺度の構成. *教育心理学研究*, 42, 463-470.
- 平木典子 (1993). アサーション・トレーニング—さわやかな〈自己表現〉のために—. 金子書房
- 平木典子 (2005). 職場のメンタルヘルス向上のためのアサーション・トレーニング 平木典子 (編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ 450 至文堂 81-88.
- 廣岡雅子・廣岡秀一 (2002). 中学生のコミュニケーション能力を高めるアサーション・トレーニング；授業での実践的研究. *三重大学教育学部研究紀要*, 教育科学, 55, 75-90.
- 堀川徳子・芝山謙二 (2006). 現代の大学生に対するアサーション・トレーニングの効果について. *熊本大学教育学部紀要*, 人文科学, 55, 73-83.
- 佐久間路子・無籐 隆 (2003). 大学生における関係の自己の可変性と自尊感情との関連. *教育心理学研究*, 51, 33-42.
- Linehan, M. M.; Heard, H. L.; Armstrong, H. E. (1993). Naturalistic follow-up of a behavioral treatment for chronically parasuicidal borderline patients. *Archives of General Psychiatry*, 50, 12, 971-974.
- McFall, R. M. & Lillesand, D. B. (1971). Behavior rehearsal with modeling and coaching in assertive training. *Journal of Abnormal Psychology*, 77, 313-323.
- 中釜洋子 (2005). 親密な関係を築きそれを維持する. 平木典子 (編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ 450 至文堂 171-180.
- 西田恵里子・奥野誠一・沢宮容子 (2009). 大学生のアサーションがライフイベントの体験に及ぼす影響. *Japanese Journal of Counseling Science*, 42, 118-124.

- 岡田 努 (1995). 大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. *教育心理学研究*, 42, 354-363.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. *教育心理学研究*, 教育心理学研究, 47, 432-439.
- Rathus, S. A. (1973). A 30-items schedule for assering assertive behavior. *Behavior Therapy*, 4, 398-406.
- Rich, Al. R. & Schroeder, H. E. (1976). Research Issues in Assertiveness Training. *Psychological Bulletin*. 83, 6, 1081-1096.
- 柴橋裕子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について. *カウンセリング研究*, 31, 19-26.
- 柴橋裕子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち. *発達心理学研究*, 2, 123-134.
- 柴橋裕子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因. *教育心理学研究*, 52, 12-23.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (2001). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討. *行動医学研究*, 4, 1, 22-29.
- 高橋 均 (2006). アサーション尺度の現状と課題. *心理臨床学研究*, 24, 5, 606-614.
- 高橋 均 (2006). アサーションの規定因に関する研究の動向と問題. *広島大学大学院教育研究科紀要*, 55, 1, 35-43.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2008). 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響の予測的研究. *パーソナリティ研究*, 16, 3, 378-387.
- Wildman, B. G. (1986). Perception of refusal assertion: The effects of conversational comments and compliments. *Behavior Modification*, 10, 4, Oct, 472-486.
- Wolpe, J. (1958). *Psychotherapy by reciprocal inhibition*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Woolfolk, R. L. & Dever, S. (1979). Perceptions of assertion: An empirical analysis.; *Behavior Therapy*. 10, 3, 404-411.